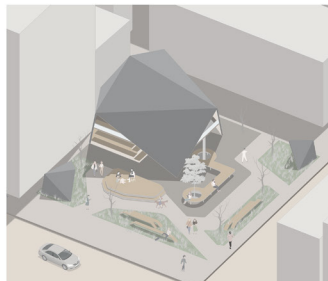




PORTFOLIO

神保町の読書東屋 01



01

ゲストサンハウス 02



09

街に寄り添う家 03



19

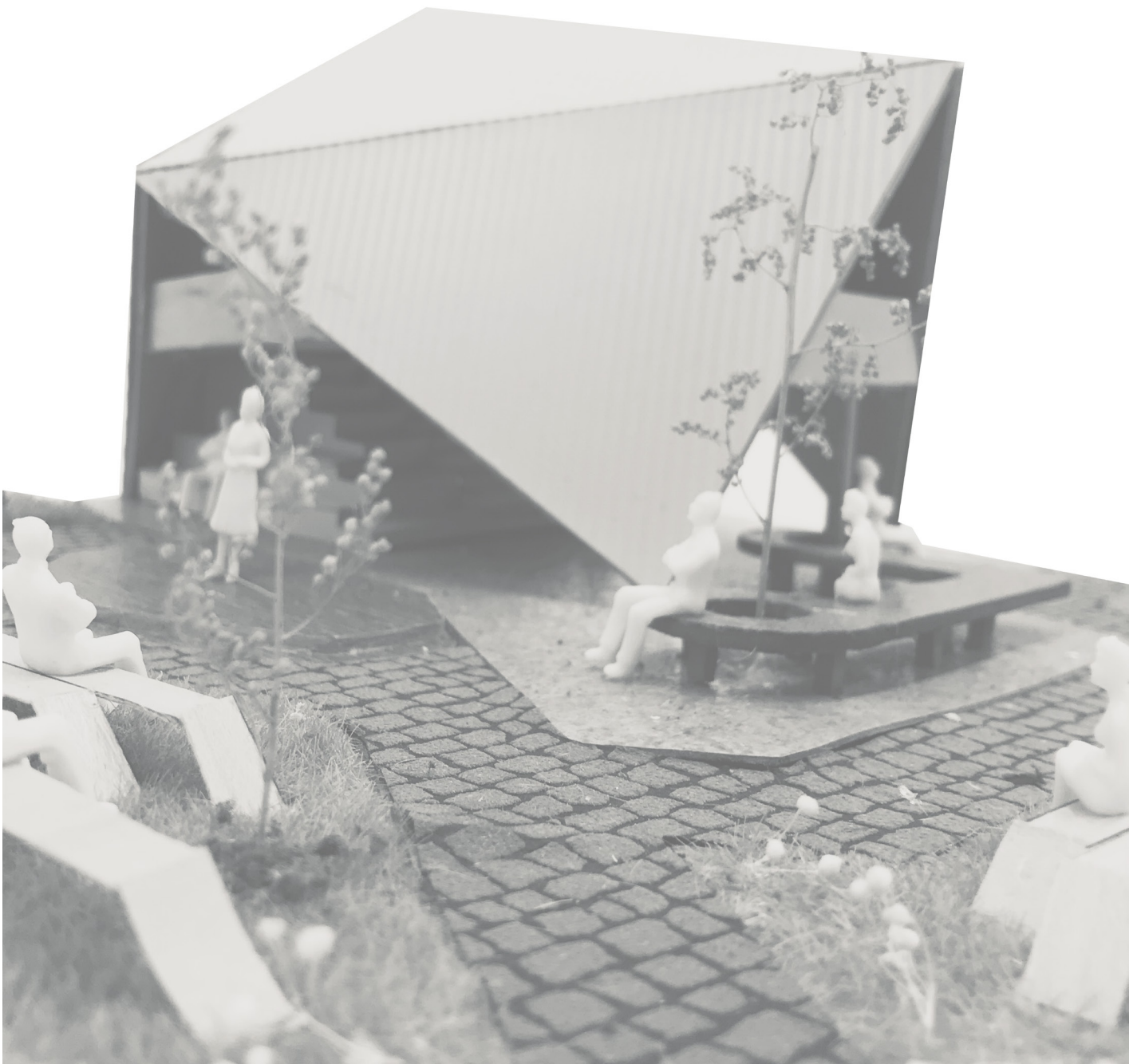
神保町の読書東屋

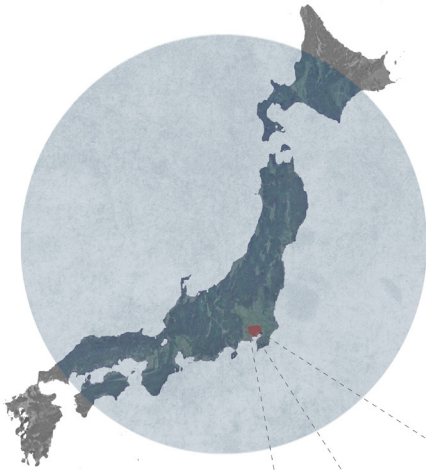
2021 年の春

日本 東京

敷地は東京の中心である千代田区神保町にある大きな幹線道路と路地に挟まれています。神保町は、明治期以降、多くの学校が周辺にできたことから、学生を対象とした商店や飲食店が多数立地するようになりました。特に明治 10 年代、法律学校も相次いで誕生したことから、書店・古書店も続々と開店、「神田古書店街」へ発展しました。インターネット時代の影響を受けたため、多くの伝統的な商店街のように、今の神保町もだんだん活気を失っていました。店舗や様々な古い建物の機能的にも形式的にも単調であり、公共空間も少ないです。

この東屋は近くの住民や学生、店員、書籍購入者などの人々の集り、休憩、読書場所、コミュニケーションのための公共空間です。神保町での様々な単調なビジネスビルの有限な空間に、新しい機能と活力がある公共空間を創造します。





THE SITE INCONTEXT TO JPAPAN



THE SITE INCONTEXT TO TOKYO



THE SITE INCONTEXT TO CHIYODA CITY

1880s

明治10年代に、神保町周辺に相次いで誕生した法律学校の学生に向けて、法律書の書店・古書店が続々と開店したことが「神田古書店街」の始まりといわれる。

1910s

1913（大正2）年の「神田大火」で神保町界隈は全焼となった。大火までは「神保町通り」を中心に発展しており、古書店も多く出店していたが、大火ののち、現在の「靖国通り」の南側が拡張され、この狭くなった土地に古書店が移転、または新規開店するようになったため、「靖国通り」の南側は、現在に至るまで古書店街の中心となっている。

1920s

「神保町通り」には、1925（大正14）年頃、東京で初めて、すずらん型の街路灯が設置されており、この頃から「すずらん通り」と呼ばれるようになった。

1940s

「太平洋戦争」における空襲で廃墟と化した神保町で、「靖国通り」沿いの古書店街は空爆による被災を免れているが、これは米軍が貴重な古書を守るため、空爆を避けたいという説もある。

1980s

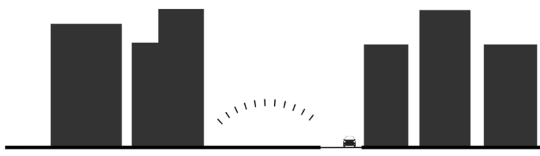
神保町がカレーで有名になったのは最近のことだと言われていて、きっかけは1980年代から1990年代に起こったエスニックブームだ。2000年以降にメディアが「神保町にはカレーの名店が集まっている」と宣伝したお陰でカレー店が増えた。



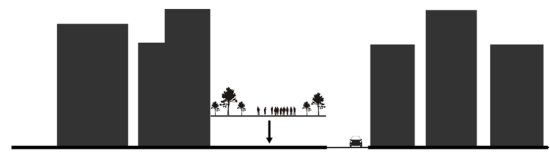
THE SITE INCONTEXT TO JINBOCHO



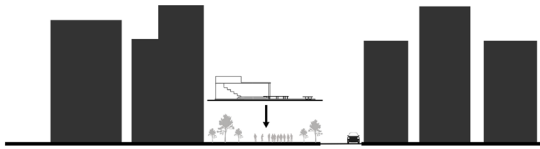
ダイアグラム



敷地は敷地は混んでいる都市空間にある



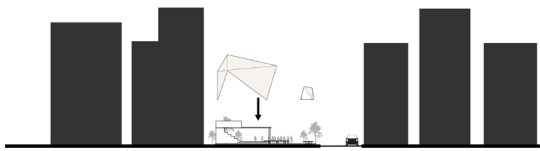
密集している建物の中に公共の休憩スペースを設ける



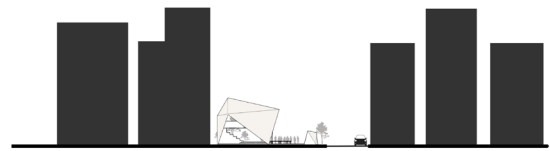
新しい機能がある装置を設置する



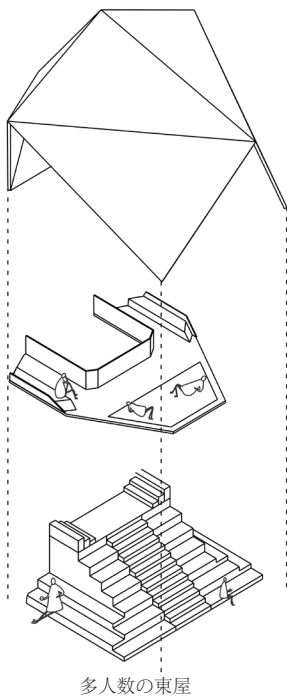
読書スペース、休憩所、コミュニケーション、室外舞台が主な4つの機能



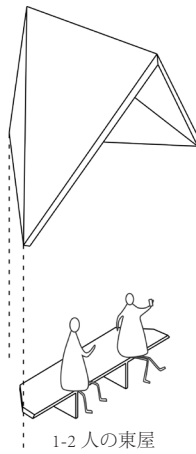
利用者の人数に応じて東屋のような異なる屋根を設置する



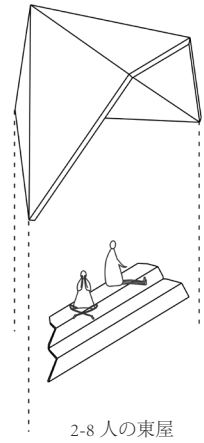
建物は視覚的にも物理的にもあざまの外観を保持しているが、空間的にはより多くの可能性がある



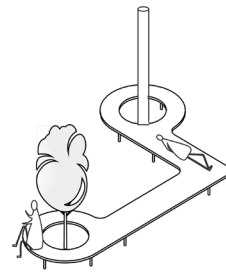
多人数の東屋



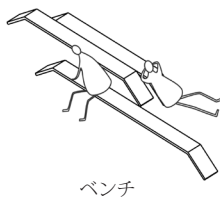
1-2人の東屋



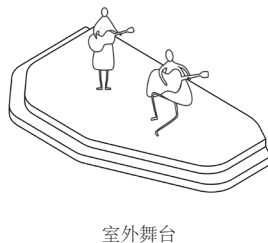
2-8人の東屋



柱と木をつなぐベンチ



ベンチ

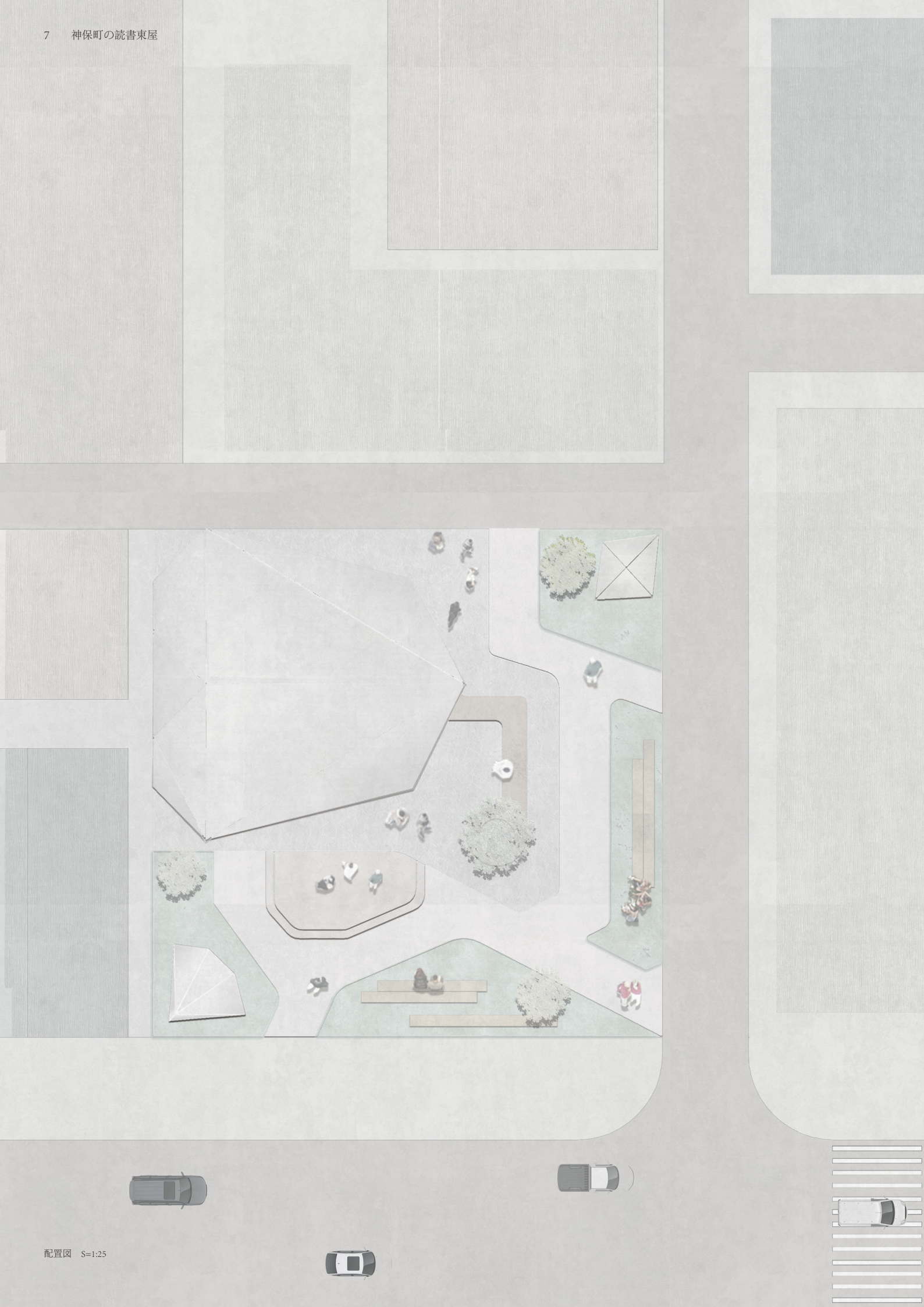


室外舞台



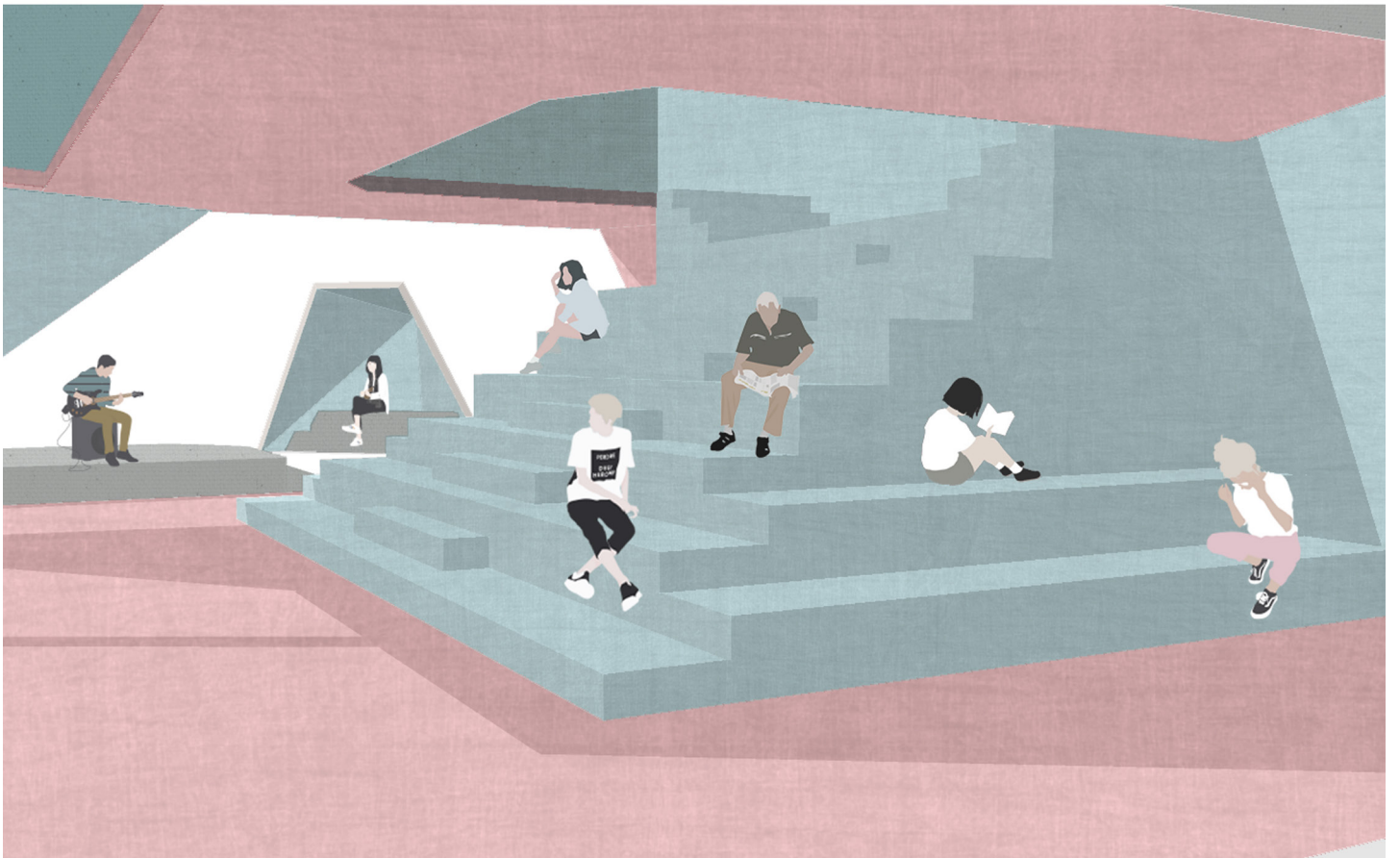
ベンチ







大きい東屋の外側



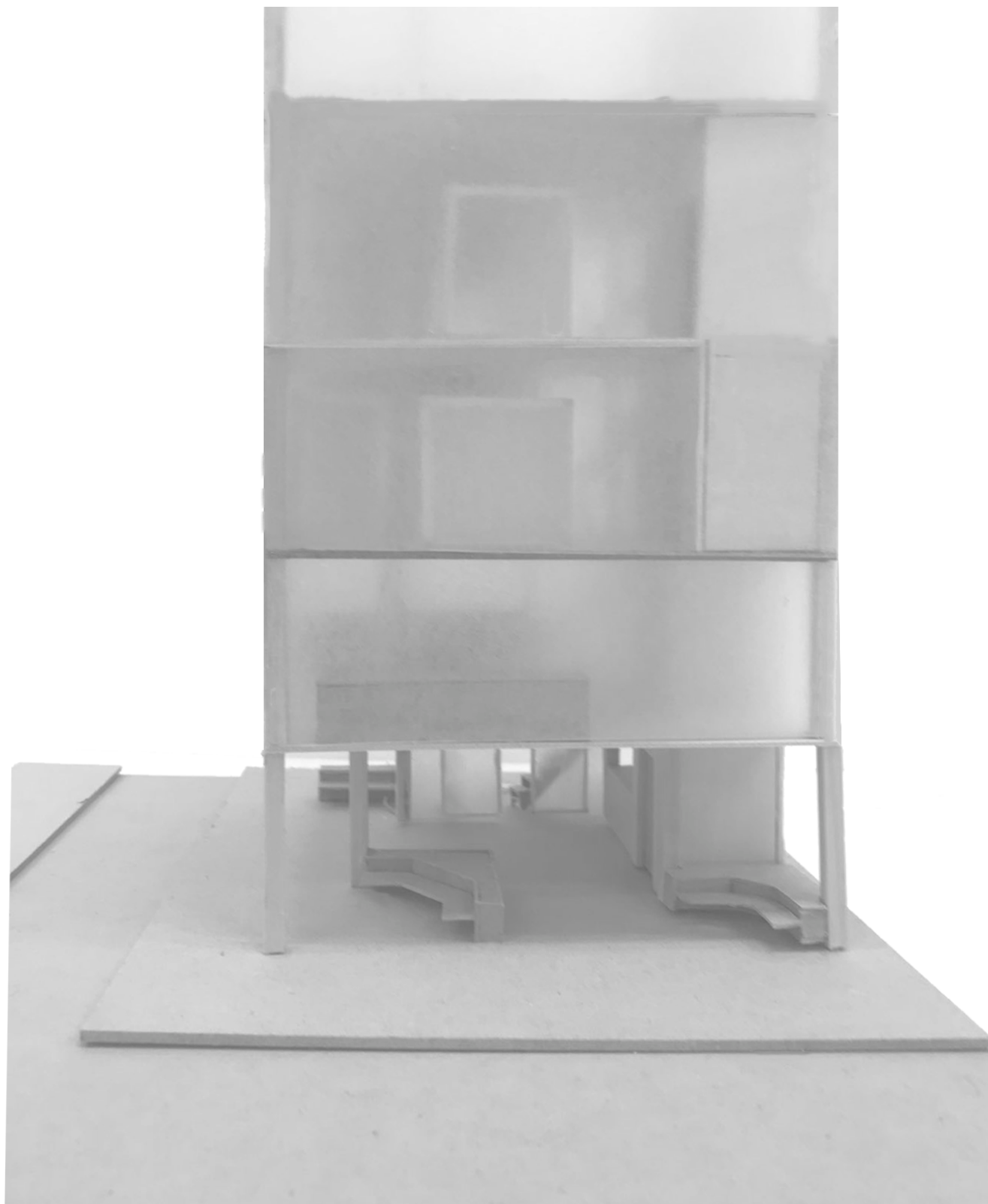
大きい東屋の一階

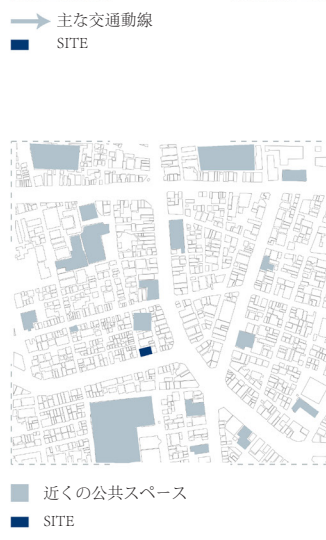
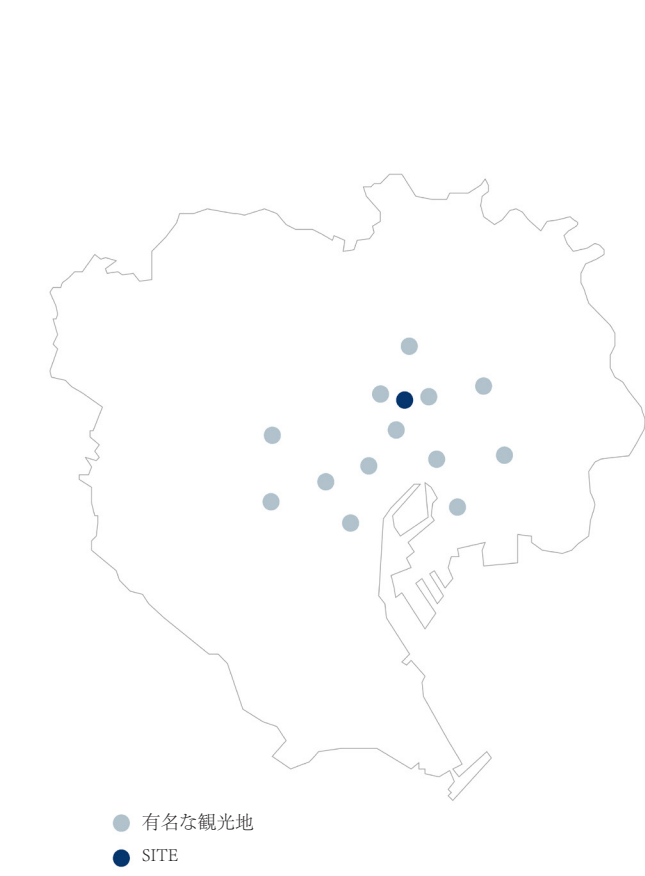
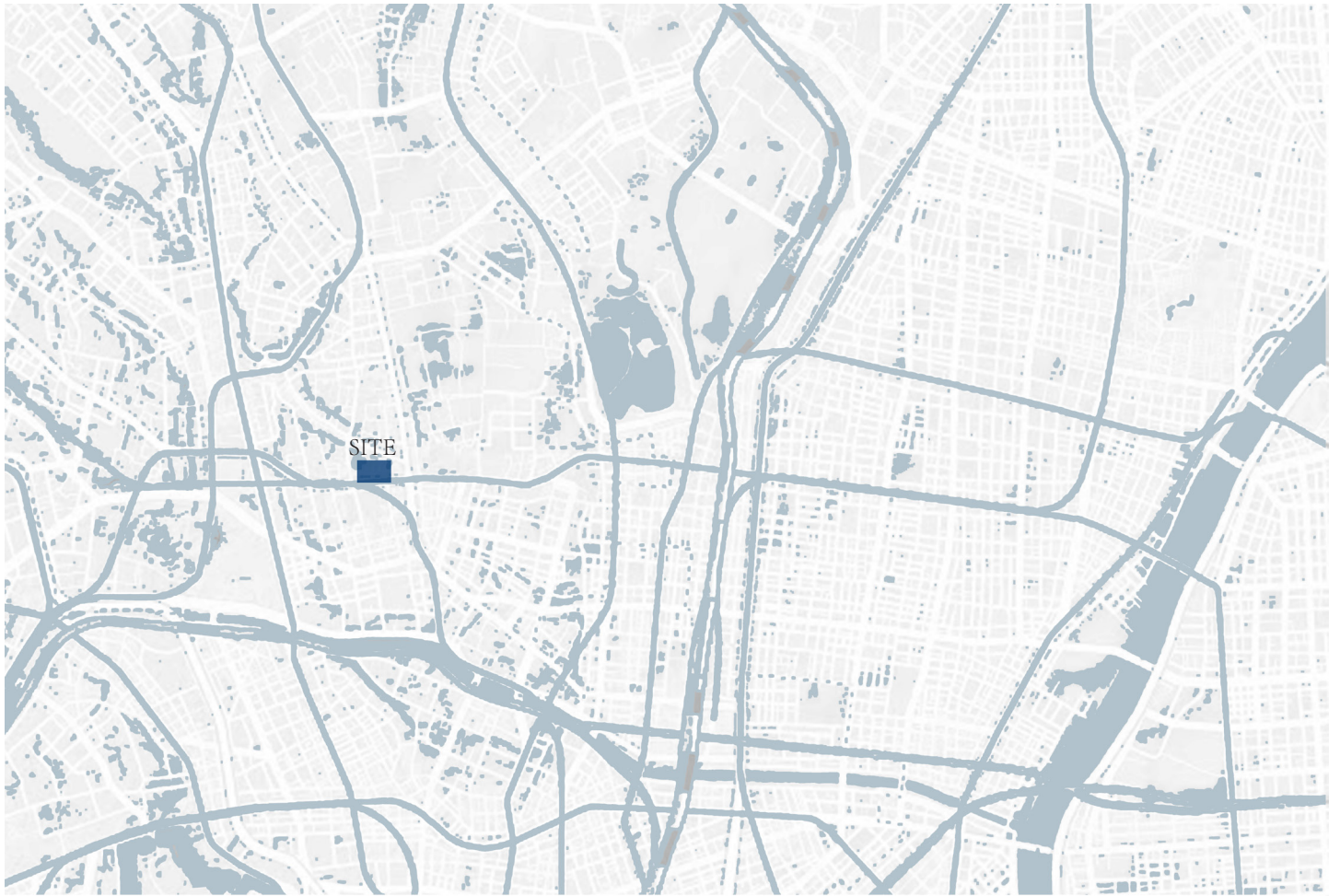
ゲストサンハウス

2021 年の秋

日本 東京

この建物は東京の本郷三丁目にある商店街で、簡易宿泊施設を作
ることを目的とするゲストハウスです。本郷三丁目は有名な観光地
ではないが、お泊りのお客様は、観光地を超えた下地の魅力に触れ
ることができて、数キロの周囲に有名な観光地もたくさんありま
す。滞在中、宿泊者の間に自然とコミュニケーションが生まれ、
現代の多様なライフスタイルに柔軟に対応できることのために、
シェアキッチン、サンルームなどの機能が設置されました。





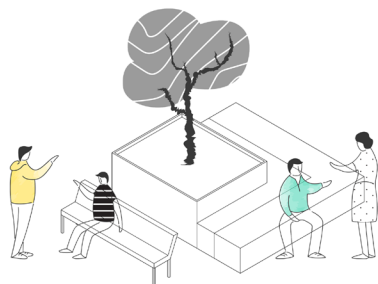
コンセプト



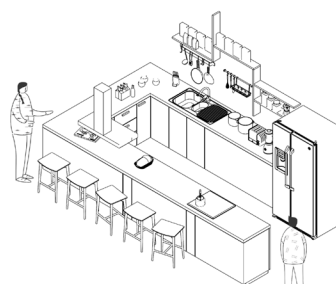
サンハウス



ゲストハウス

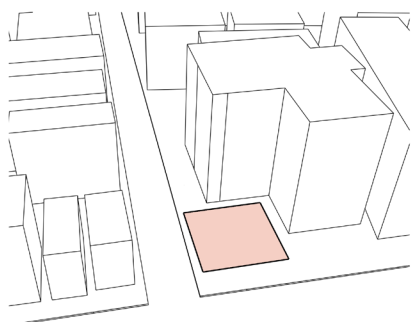


コミュニティスペース

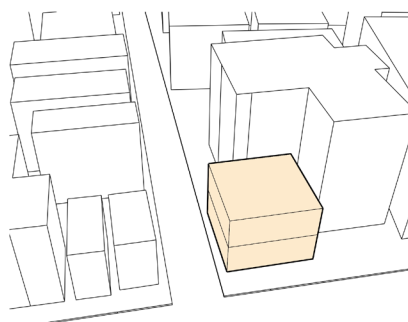


シェアキッチン

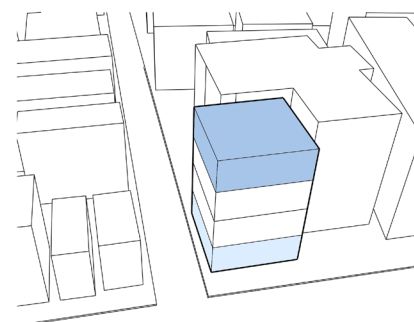
ダイアグラム



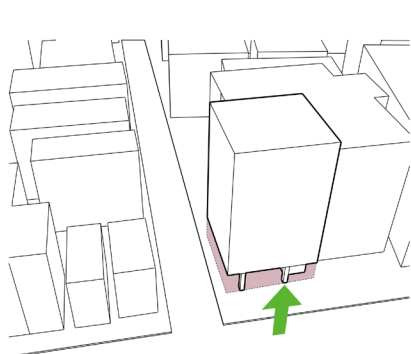
敷地は古い商店街にある



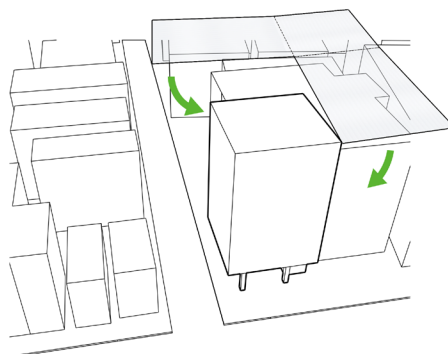
2階建てのゲストハウスを建てる



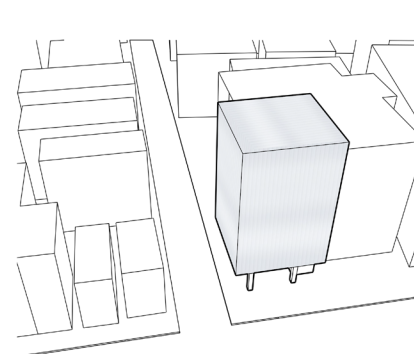
ゲストハウスの上下にそれぞれ1階のサービススペースを設ける



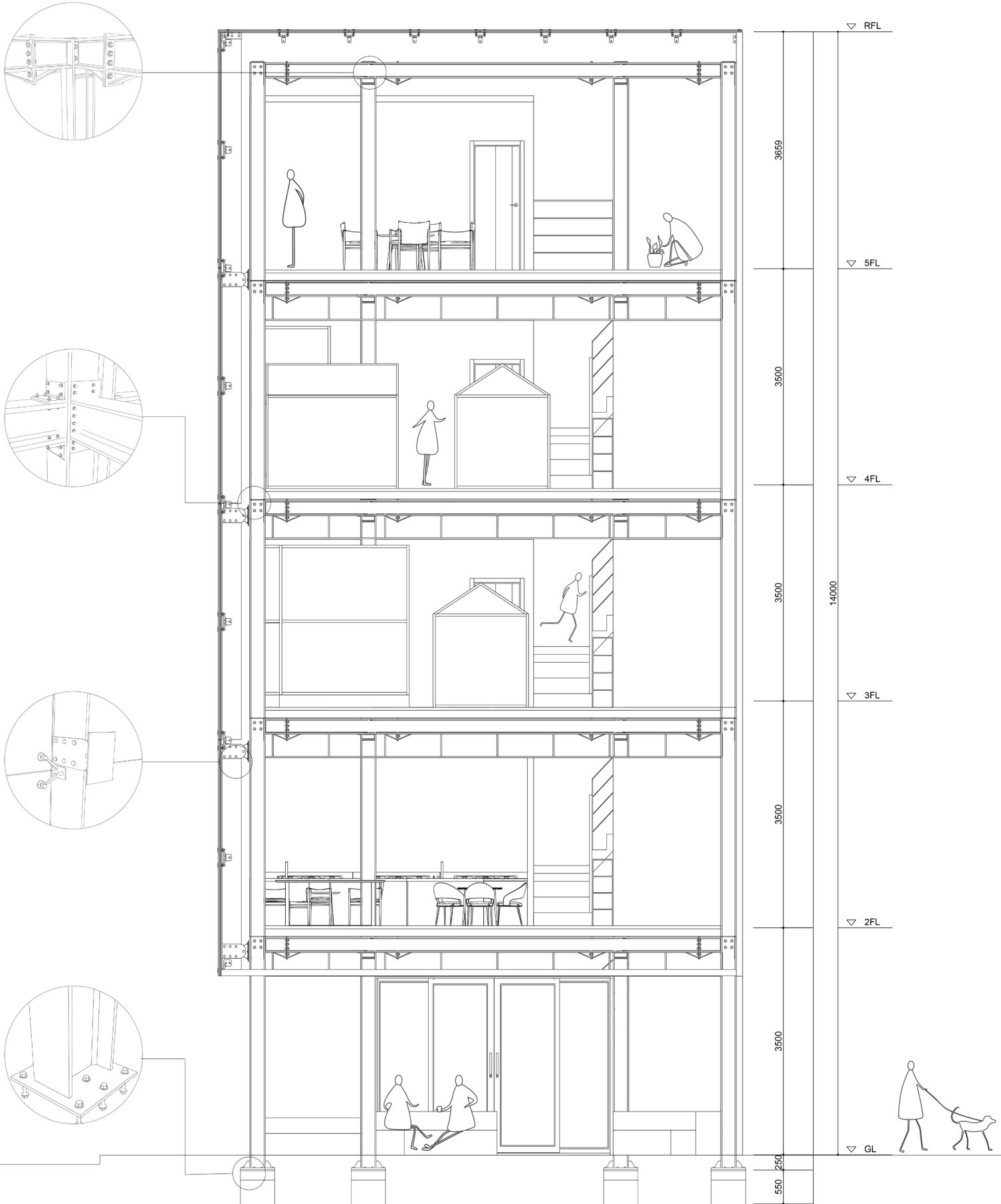
建物全体をリフトアップして近くの人に自由な公共空間を提供する

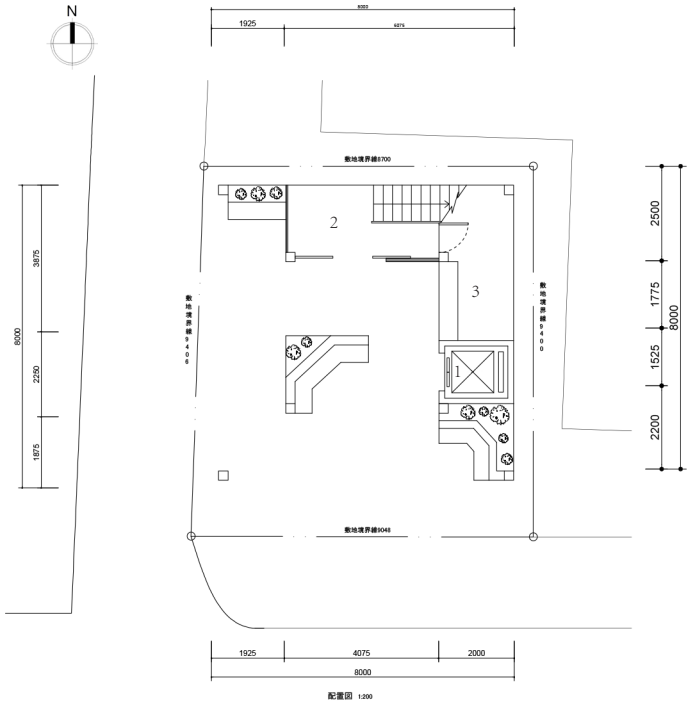


建物の外壁を半透明の断熱性のある新素材にする

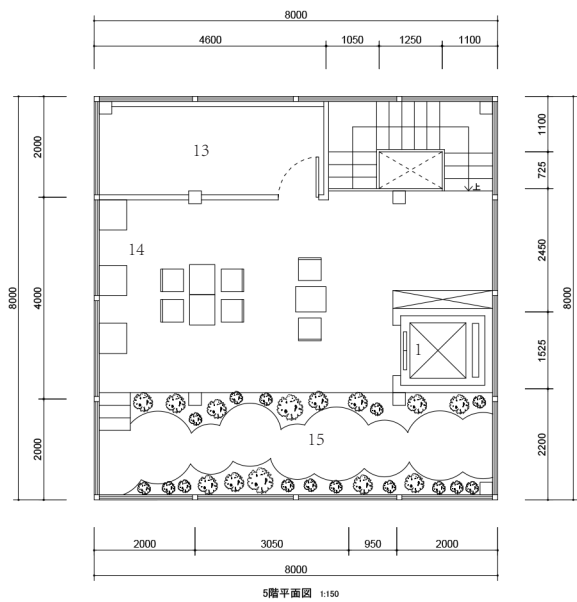
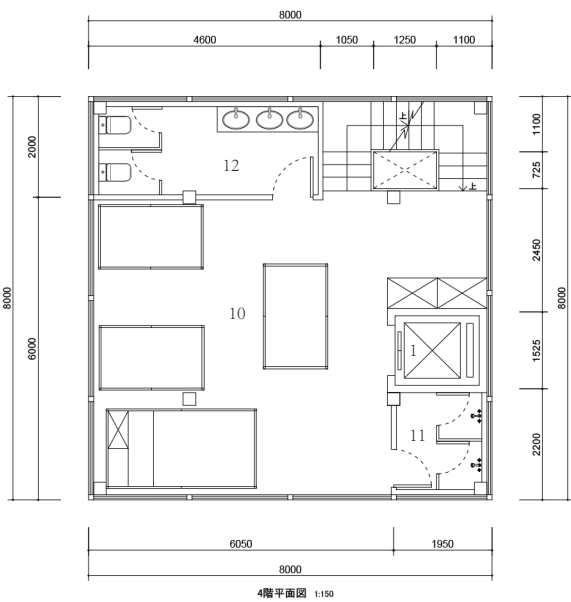
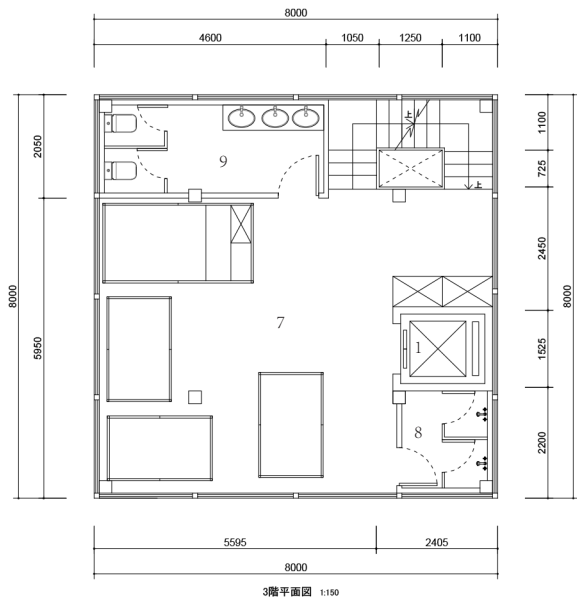
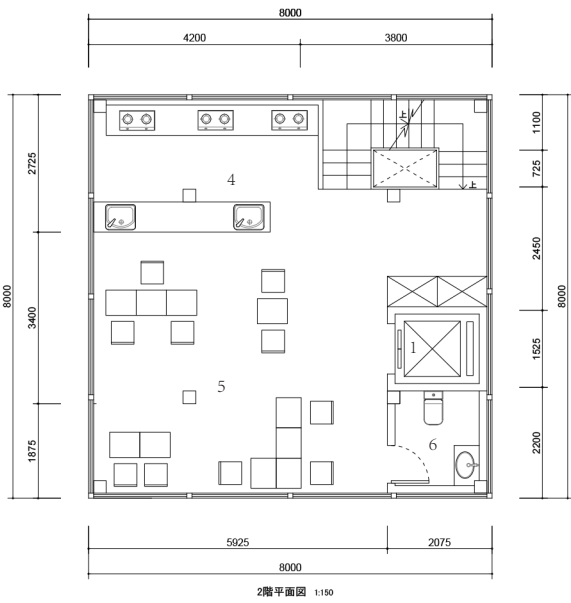


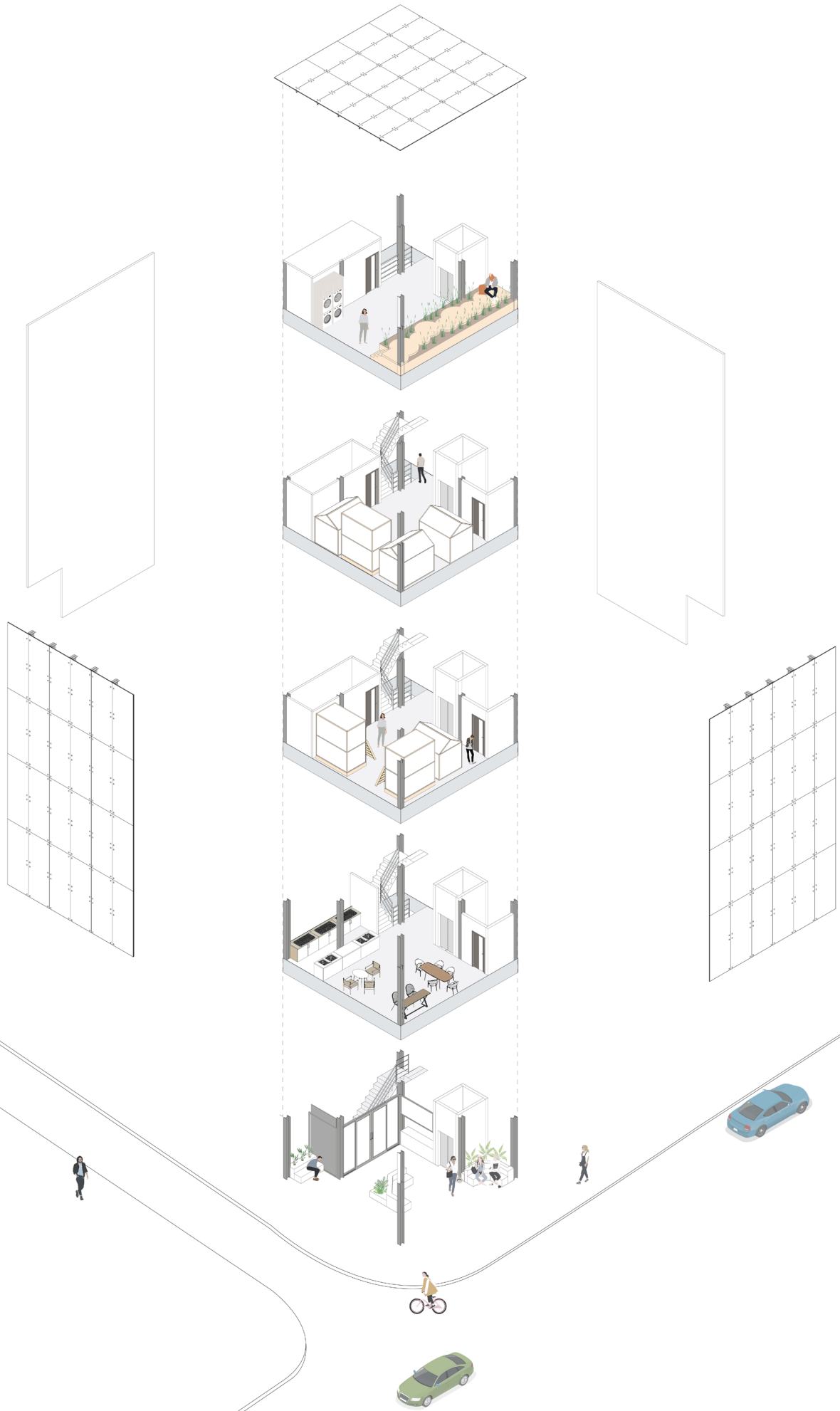
ゲストサンハウス





- | | |
|------------|-------------|
| 1 エレベーター | 9 男性トイレ |
| 2 玄関 | 10 女性ゲストルーム |
| 3 受付 | 11 女性シャワー室 |
| 4 シェアキッチン | 12 女性トイレ |
| 5 ダイニング | 13 係員室 |
| 6 トイレ | 14 洗濯所 |
| 7 男性ゲストルーム | 15 サンプルーム |
| 8 男性シャワー室 | |









三階のゲストルーム



四階のゲストルーム



五階のサンルーム



二階のシェアキッチン

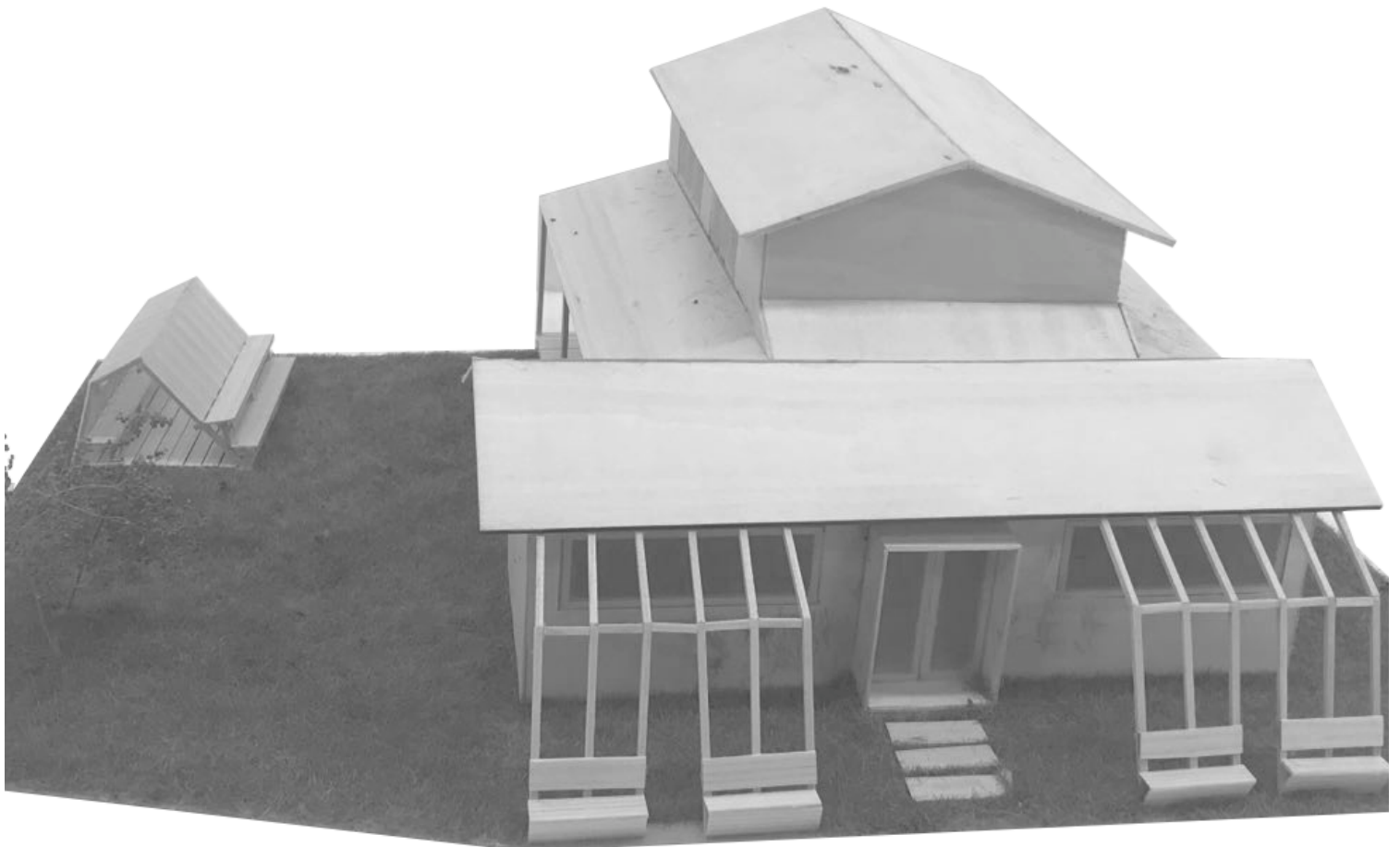
街に寄り添う家

2021年の冬

日本 東京

都市での大きな経済活動から逃れるため、家族の面倒を見ながら生活するため、自然の多いところへ生活を移すためなど、さまざまな理由から「地方移住」「多拠点居住」の考え方が普及しつつある。その一方で、地方では高齢化が進み、使われていない住宅「住宅ストック」が増え続けているため、古い住宅の再利用は重要な課題になります。

敷地は三重県松阪に位置して、周辺は農地と住宅がまばらに広がるエリア。敷地内には夫婦の母屋、以前祖父の住んでいた住宅、夫が作業場所として利用している小屋が分棟して建っている。今回は、その中の祖父母の住んでいた住宅を中心に改修の計画を行う。祖父母の家は木造二階建てで、現在は利用されていない。このような状況を踏まえ、本設計は古い住宅に新しい機能を与え、そして公共の属性を強化し、街の一部になると考えています。



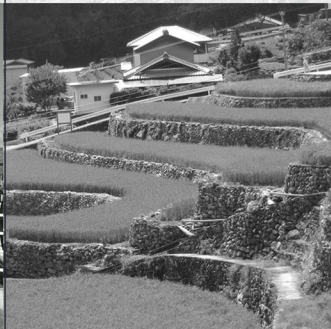


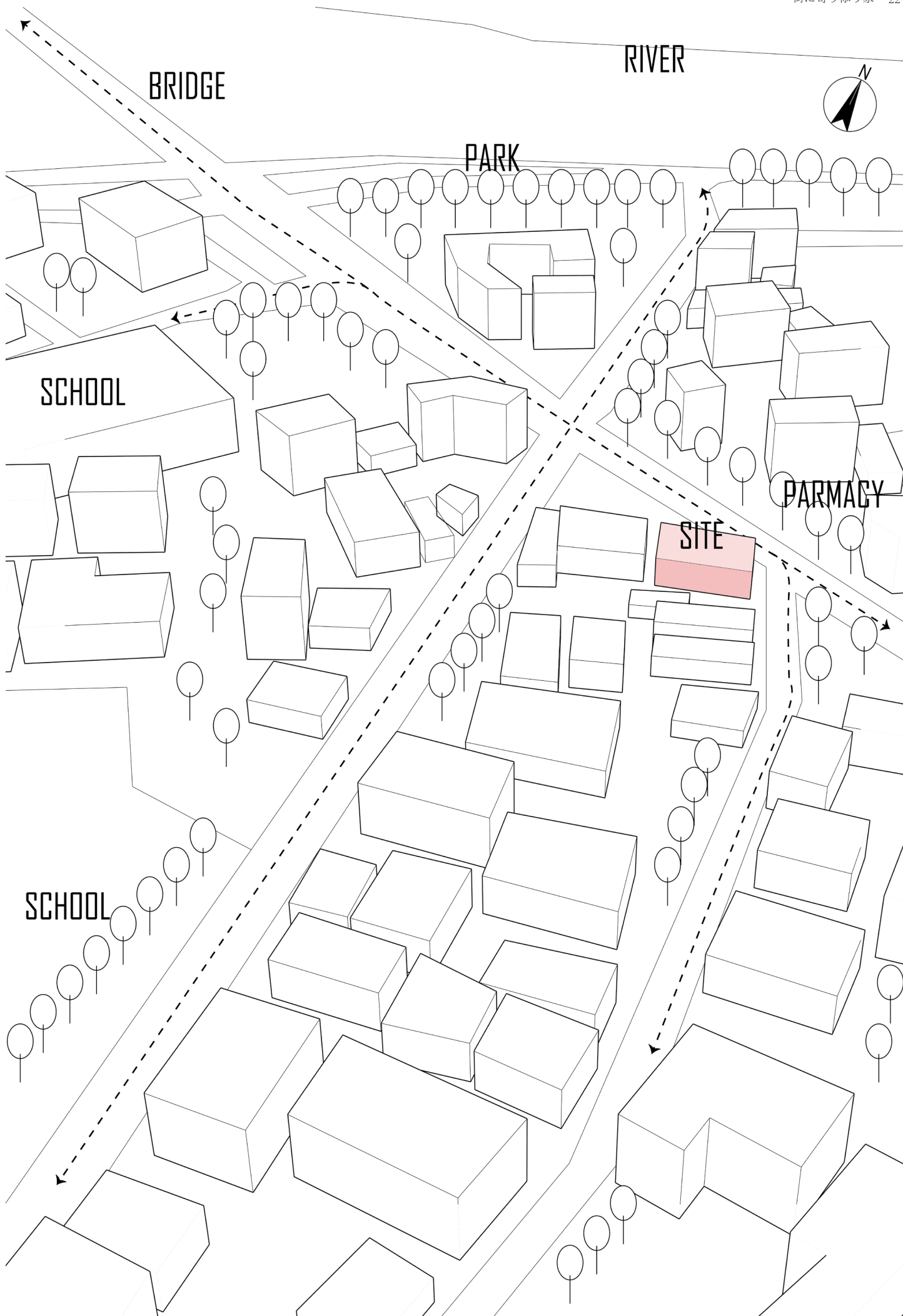
敷地の近くに小学校と幼稚園があるので、子供のためのデザインは今回のリノベーションの重要なことです。

敷地は、農地が多い地域にあり、地方に移り住むことや廃屋の再利用は、これらの地域の重要な発展プロジェクトとなっています。

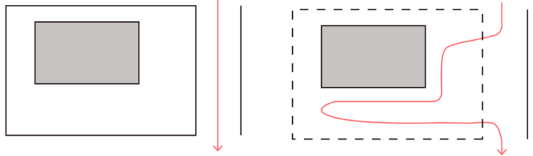
少子化と大都市への若者の流入により、地方では高齢化が進んでいる。高齢者の休憩スペースとコミュニケーション空間も重要な課題です。

敷地内に住んでいる夫婦にとっては、普段の生活に加えられた、敷地内別荘のような使い方ができるかもしれない。下は現場の写真です。



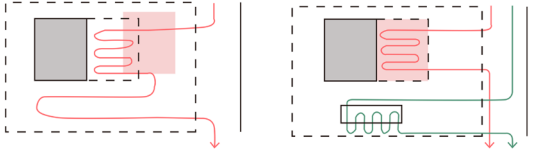


行動動線



單一の動線

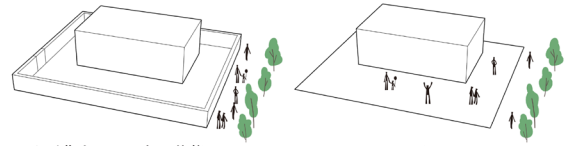
庭を街の一部にする



家の一部を共用スペースにする

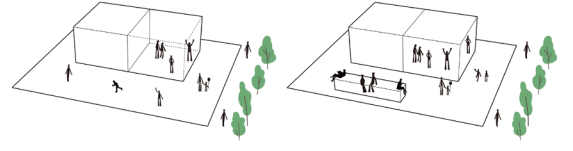
庭に目的に合う装置を造る

人の集まり



人が集まっていない状態

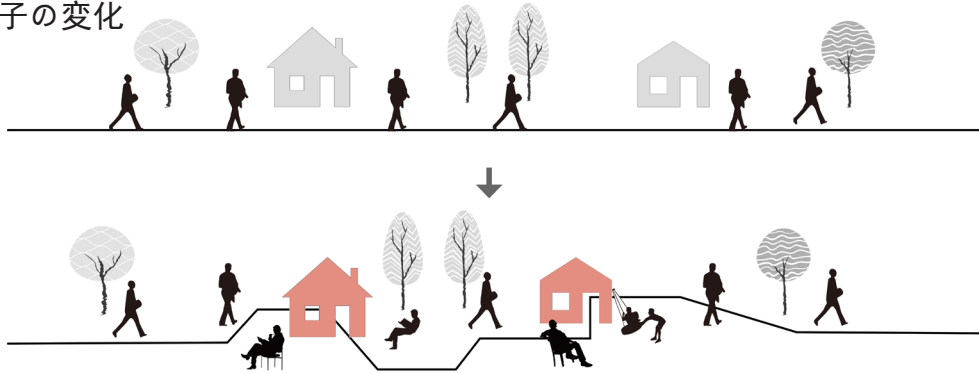
庭に集まる



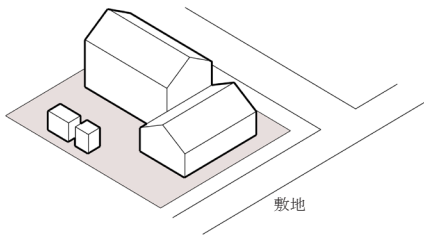
庭と家の一部に集まる

近くの人の暮らしが変わる

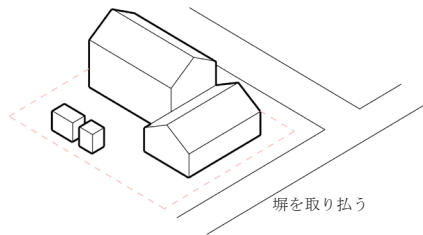
生活の様子の変化



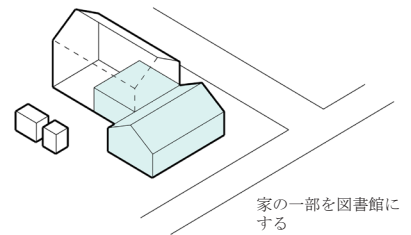
ダイアグラム



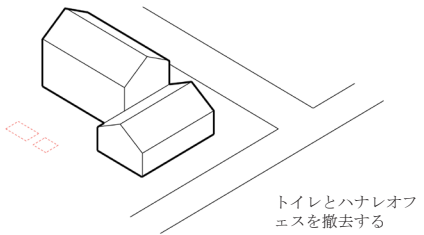
敷地



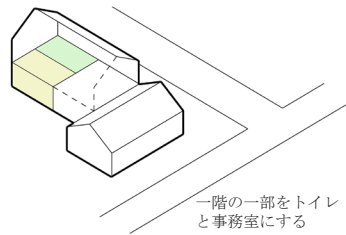
塀を取り払う



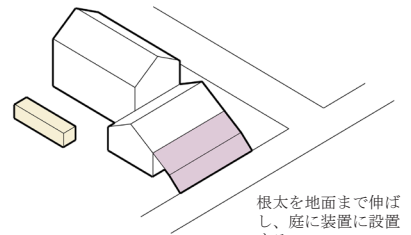
家の一部を図書館にする



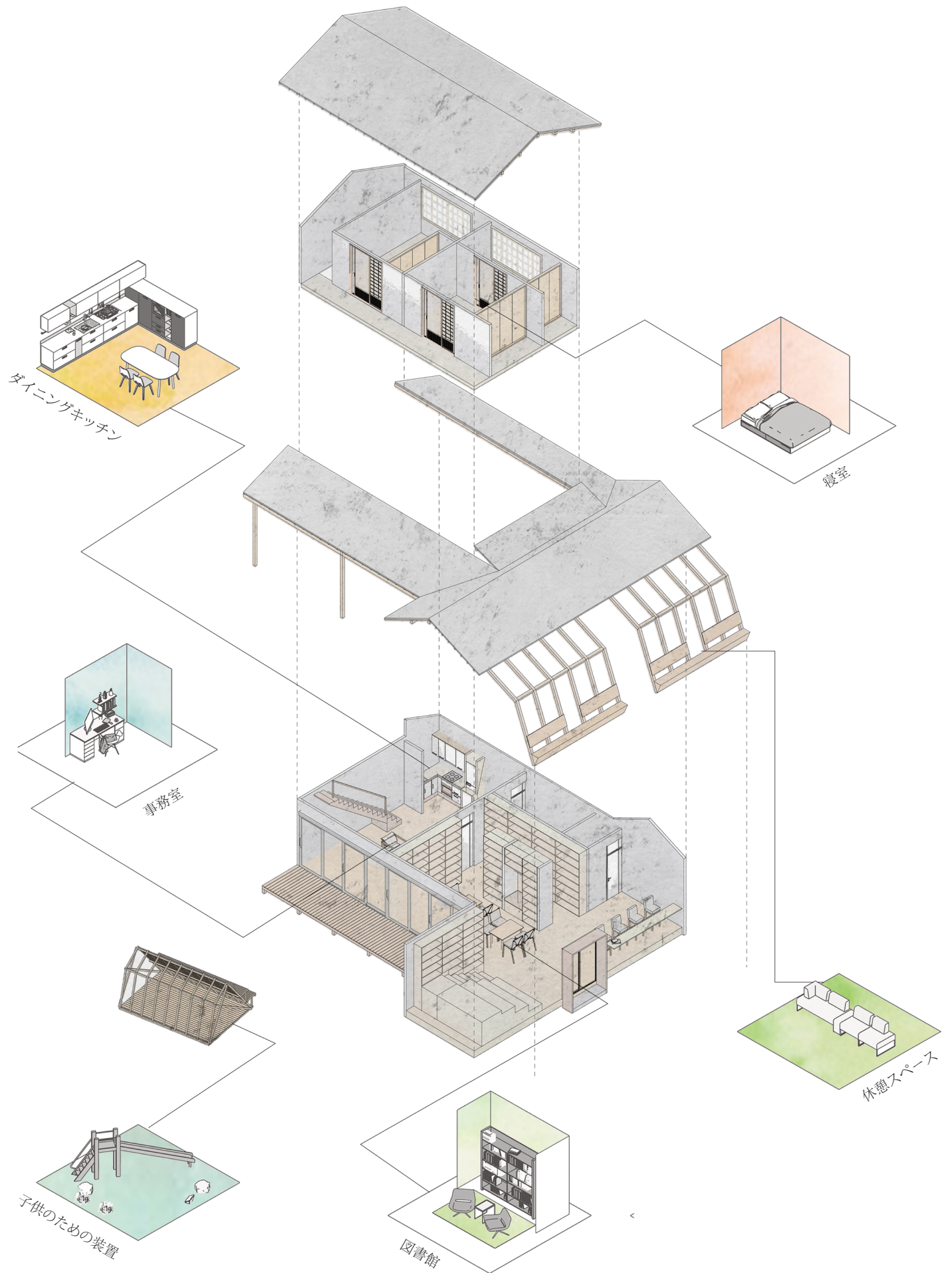
トイレとハナレオフエスを撤去する



一階の一部をトイレと事務室にする



根太を地面まで伸ばし、庭に装置を設置する



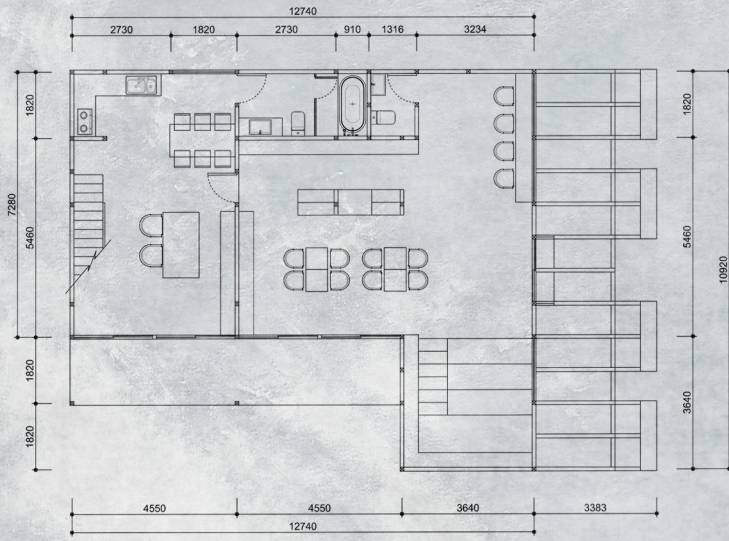




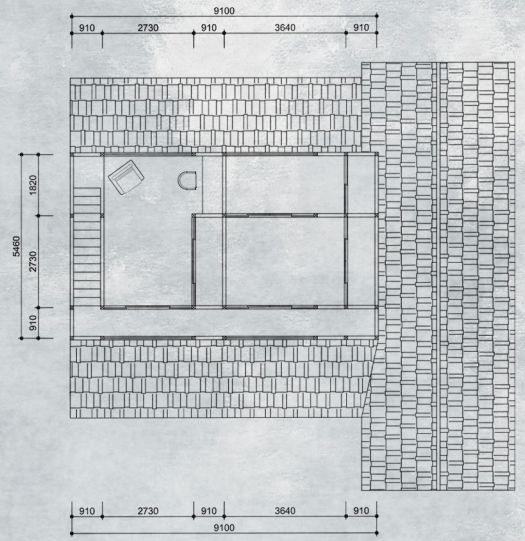
一階の図書館



一階の事務室



1階の平面図 S=1:200



2階の平面図 S=1:200





建物の南側



建物の東側

